

Title	バルザックにおける語りの技法とその進化 : 1830-1832年雑誌掲載作品群とその後の展開について
Author(s)	奥田, 恭士
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49092">https://hdl.handle.net/11094/49092</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	おく だ やす し 奥 田 恭 士
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 2 2 3 1 1 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	<b>バルザックにおける語りの技法とその進化～1830-1832 年雑誌掲載作品群とその後の展開について～</b>
論文審査委員	(主査) 教 授 柏木 隆雄  (副査) 教 授 和田 章男 准教授 服部 典之

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は 19 世紀フランス文学において巨大な足跡を残したオノレ・ド・バルザックの 1830 年から 1832 年にかけて発表された短編における物語の「語り手」が、のちの『人間喜劇』の形成過程において、いわゆる一人称を用いる事が多いが、それが作者らしく想定されるものから、匿名の語り手となり、さらに『人間喜劇』における人物再登場法の導入による作中人物へと変換することによって、バルザックの小説作法と彼の作る物語構造に大きな変化と混乱がもたらされ、そこに小説家バルザックの進化と『人間喜劇』全体の深まりを見るものである。論文は A4 判、本文、註、参考文献、補遺資料を含め 318 頁。序論を含め全 4 章 20 節からなる。

第 1 章はすでに『結婚の生理学』から一人称の語り手の機能にバルザックが意識的であったことを指摘、『不老長寿の霊薬』、『サラジーヌ』、『赤い宿屋』を取り上げ、作者らしき「私」や、無名の「私」など、さらに話者から作者へと逆行する現象や、「私」が作中人物を想定して書かれた可能性を説き、「語り手」《je》(anonyme) の階層分化を個々のテキストに従って分析する。

第 2 章は、バルザック独特のテキスト「再利用方式」から生まれる「テキスト・カードル」の変容をテーマに、ある一つのレシが現テキストの中に、どういう過程で位置づけられたかを検証する。複数の挿話から構成される未完の『フランス閑談見本』、『続女性研究』を取り上げ、バルザックがテキストを意識的に操作する過程を詳細に検討、他のテキストへの再利用に際して生じた加筆・修正・削除を整理して、そこに現れる矛盾や特徴などを分析、扱うレシの内部の問題が、それを含む物語全体の構造の変化をもたらすことを明らかにする。

第 3 章では、第 1 章とは逆の「語り手」《je》の三人称化の問題を、『人間喜劇』の主たる「語り手」ビアンションとデルヴィルの例に見る。『女性研究』および『続女性研究』におけるビアンション、『シャベール大佐』、『ゴブセック』におけるデルヴィルは、テキスト・カードルの中で、話者、匿名の《je》から、テキストの進化と共にそれぞれビアンション、デルヴィルと特定され、『人間喜劇』の構造化に大きな意味を持つことを論じる。

第 4 章は『海辺の悲劇』、『谷間の百合』、『ルイ・ランベール』、『ファチノ・カーネ』、『Z・マルカス』など『人間喜劇』の構想が具体化しつつある 1834 年以降の作品における「語り手」《je》の機能について考察。いずれも《je》を構造化し、その幾つかは従来の書簡形式や自伝形式を巧みに利用しながら、たとえば『Z・マルカス』で作品の主体である語り手《je》を分岐させるなど、新しい物語効果を生む装置として機能させており、また『ボエームの王』では意識的なテキスト操作が行われ、《je》を中心にした枠の変更、テキストの「中断」および分断化を通して、「語り

手」《je》のねじれが生じていることを指摘、バルザックにおけるテキスト操作の意識化の有効なモデルとして詳細に分析した後、結論で初期作品からの《je》の変貌の意義を総括して、もともと作者らしき《je》から始まって、さまざまな形態を取りながら、やがて『人間喜劇』の構想が固まるのにつれて、その登場人物群に析出されていくとする。

## 論文審査の結果の要旨

バルザックの『人間喜劇』は現行プレイヤッド版で全 12 巻、それに「未刊テキスト」、「雑誌評論」さらに書簡を加えれば膨大な量に達する。しかも作品は 1829 年の執筆以来、雑誌に連載しては短編集として刊行、後に別の叢書として新たな改変を加えて上梓を重ねつつ、1840 年代から 3 研究 6 情景のプランに基づいて統合していったもので、形式、内容ともに極めて複雑なものとなった。本論は、従来バルザックの伝記的問題の他に、個々の作品成立や、各編に共通する思想、テーマの検討や分析に力が注がれることが多かった膨大な『人間喜劇』成立過程の鍵を、「語り手」の創造という点に見て、バルザックの小説技法の進展と『人間喜劇』の成熟とを絡め合わせて論じた意欲的な試みである。

論者は取り扱う主な短、中編小説を、初出からフルヌ版まで、あるいは以後の版まで丹念に辿り、その異同を見る作業を重ね、さらに内外の先行研究のほとんどを渉猟して、当該作品の「語り手」がいったい誰を指すのかを綿密に論じている。元来改変の多いテキストについて、このことを論じるのは、簡単に見えて実は甚だ厄介で、これはバルザックを一通り勉強した者の痛感するところである。これを単なるバルザックの誤解や強引さのせいにして、その作品独自のものとして意に介さずに読み進めたり、また徒に拘泥して、読み悩むことをせず、正面から語り手の問題を取り上げる姿勢がこの論文の基本であり、その意欲と誠実さをまず評価したい。

18 世紀における自伝文学や書簡体文学において、歴史的叙述の三人称ではなく、一人称「私」が多く使われるが、それら前代の文学を糧にバルザックが自己の小説世界を開拓するにあたって、『結婚の生理学』など、初期の作品から「語り手」を意識的に使っていることから、「語り手」の問題は極めて重大である。論者がさまざまなレベルでの「語り手」《je》の出現を分析して、従来謎とされ、曖昧とされてきた「語り手」が、バルザックの『人間喜劇』の構成立と、きわめて大きな関係があることを明らかにしたこと、とりわけ第 2 章において、既成の短編小説、あるいは中編小説の一部のエピソードが、他のさらに大きな、別のテーマの小説に再利用される過程を丹念に追い、そうした度重なる再利用の技法的、小説的意義を論じたことなど高く評価できるし、第 3 章でピアンション、デルヴィルといった『人間喜劇』における「語り手」として重要な登場人物が、小説の改変、再編を通して、だんだんにその役割が極めて意味あるものとなるのを具体的に明らかにするのは、この論全体の趣旨、あるいは意義を代表するものである。誰を「語り手」とするかは、19 世紀後半から意識的になるとされるが、バルザックにおいて、既に様々な「私」を描く試みがされていることを明らかにした本論文は、バルザック以後の作家たちの表現の研究においても大きな示唆を与えるだろう。

ただ論述がやや細かになりすぎる点や、また分析に用いる言葉の定義や、その応用形態の説明にもう少し工夫が施されれば、いっそう論者の論点が明確になったのではないか。とりわけバルザックの一人称のさまざまな形態の集大成、一つのモデルと論者がいう『ボエームの王』についての第 3 章は、議論がいささか錯綜する観がある。しかしこれらの欠点は、議論をより精密にしようとする論者の苦辛の結果に他ならず、他日上梓の上で改善されるだろう。日本のみならず、フランスにおいてもこうしたテーマで『人間喜劇』の「語り」の相を細かに分析した論考は少なく、本論文が博士（文学）の学位を得るにふさわしいと認定する。